

マドゥスーダナ・サラスヴァティーの漸進解脱説

眞 鍋 智 裕

The *Kramamukti* Theory of Madhusūdana Sarasvatī

Tomohiro MANABE

Abstract

The Advaita (Vedānta) School aims at being liberated from transmigration by the realization (sākṣātkāra) of brahman's identity, the underlying principle of the universe, and ātman, that of individuals. Accomplished when the realization occurs, this kind of liberation is called immediate liberation (*sākṣātmukti). Conversely, the Advaita School approves the gradual liberation theory (kramamukti) that attains a state of liberation gradually.

Śaṅkara (ca. -756-772-), a founder of the Advaita School, studied the theory of gradual liberation in his works. Subsequently, the theory of gradual liberation has seldom risen above the arguments in Advaita literature. However, we can discover a certain amount of discussion regarding gradual liberation theory in the works of Madhusūdana Sarasvatī that flourished around 16 C.E. In this paper, I will present an example of what gradual liberation theory was in the later Advaita School by considering Madhusūdana's works.

Madhusūdana's gradual liberation theory follows in Śaṅkara's footsteps fundamentally. However, differences between their gradual liberation theories exist. These differences are as follows: According to the description in the Scriptures, Śaṅkara said that a person can gradually be liberated by meditating on the knowledge of five fires (pañcāgnividya). In contrast, Madhusūdana restricted the means of gradual liberation to meditation on the conditioned brahman more strictly. Furthermore, Madhusūdana's works reveal the description of the way of liberation in the Hiraṇyagarbha world that is absent in Śaṅkara's works.

1. 問題の所在

インド哲学学派の一つであり、聖典「ウパニシャッド」(Upaniṣad) 群の解釈学派であるアドヴァイタ・ヴェーダーンタ (Advaitavedānta) 学派 (以後、アドヴァイタ学派と略記) は、宇宙の根本原理であるブラフマン (Brahman) と個的存在の根本原理であるアートマン (Ātman) が同一であることを直証 (直観, sākṣātkāra) することによって輪廻世界から解脱 (mokṣa, mukti) することを目的としている。そして、このようなブラフマンとアートマンが同一であること (梵我一如, brahmātmaikyatva) の直証による解脱は、その直証が起こるその瞬間に達成されることから、即時解脱 (*sākṣātmukti) と

呼ばれる。その一方、アドヴァイタ学派では、「ウパニシャッド」等の聖典の記述に基づいて、次第に解脱の境地に達する漸進解脱 (kramamukti) の教説も認められている。アドヴァイタ学派の開祖であるシャンカラ (Śaṅkara, ca. -756-772-) は *Brahmasūtrabhāṣya* (BSBh) 等においてウパニシャッドの教説を整理し、漸進解脱説を論じている⁽¹⁾が、それより後の論書は既述の通りアドヴァイタ学派の目的は即時解脱であるため、漸進解脱説をあまり議論の俎上に載せることはない⁽²⁾。ところが、16世紀頃に活躍したマドゥスーダナ・サラスヴァティー (Madhusūdana Sarasvatī, 以後マドゥスーダナと略記) の著作には漸進解脱説に関するまとまった議論が見られる。本稿では、マドゥスーダナの著

作に見られる漸進解脱説を取り挙げることによって、後期アドヴァイタ学派⁽³⁾における漸進解脱説とはどのようなものか、その一端を明らかにする⁽⁴⁾。

2. *Bhagavadgītāgūḍhārthadīpikā* に 見られる漸進解脱説

シャンカラの漸進解脱説は、*Chāndogyopaniṣad* (ChāndUp) や *Bṛhadāraṇyakopaniṣad* (BṛhadUp) に見られる、五火 (pañcāgni) の教えを知ることによって神道 (神に通じる道 *devayānamārga, *devayānapatha) を通ってブラフマンの世界 (brahmaloka) に到達する、という五火二道の教説⁽⁵⁾に基づく五火の明知 (pañcāgnividya) に関連している。この五火の明知は瞑想方法の一つである念想 (upāsana)⁽⁶⁾の一種であると考えられている⁽⁷⁾。漸進解脱説では、このブラフマンの世界に至った人は、ブラフマンの世界が帰滅する時に解脱に至るといふ⁽⁸⁾。また、BSBh には *Praśnopaniṣad* (PrUp) に見られる聖音オーム (om) に対する念想に基づいても漸進解脱が起こることが述べられている⁽⁹⁾。このように、漸進解脱は念想によるものであることが理解される。また、アドヴァイタ学派ではブラフマンに関して属性を持たない (nirguṇa) 高次のブラフマン (parabrahman) と属性を持つ (saguṇa) 低次のブラフマン (aparabrahman) とを区別するが、シャンカラにおいて漸進解脱をもたらす念想は、属性を持つ低次のブラフマンに対する念想である⁽¹⁰⁾。

マドゥスーダナの著作に見られる漸進解脱説でも、シャンカラの漸進解脱説を踏襲し、五火の明知に基づく議論と聖音オームの念想に基づく議論が見られる。以下では先ず、聖典 *Bhagavadgītā* (BhG) に対するマドゥスーダナの註釈 *Bhagavadgītā-gūḍhārthadīpikā* (BhGGAD) に見られる五火の明知に基づく漸進解脱説を検討したい。BhG では 8.23-27 において五火二道説が説かれるが、マドゥスーダナはその導入部とも言える BhG 8.23 の註において、神道へ去った者について以下のように述べる⁽¹¹⁾。

Passage 1 BhGGAD 403,26-28 (on BhG 8.23): devayāne pathi gatās tu yady api kecid āvartante, pratīkopāsakās taḍillokaparyantaṃ gatāḥ, hiraṇyagarbhaparyantaṃ amānavapurūṣanītā api pañcāgnividyaḍyupāsakā atatkratavo bhogānte nivar-

tanta eva, tathāpi daharādyupāsakāḥ kramaṇa mucyante bhogānte.

一方、神に通じる道に行った者達で、或る者達は戻って来る。即ち、象徴 (pratīka) を念想する者達で稲妻 (taḍit) の世界にまで行った者達は、[稲妻の世界の享受が終わる時に必ず戻って来るのであり]、ヒラニヤガルバ (Hiraṇyagarbha) に至るまで、人でないプルシャ⁽¹²⁾に導かれた者であっても、それ (ヒラニヤガルバ等) への念想を有しない、五火の明知等を念想する者達は、[ヒラニヤガルバの世界の] 享受の終わる時に必ず戻って来る。そうであるとしても、小さな (dahara) [虚空] 等⁽¹³⁾を念想する者達は、[ヒラニヤガルバの世界の] 享受の終わる時に次第に解脱する。

ヒラニヤガルバとは、インドにおける現存最古の聖典 *Rgveda* において最高神の地位にある神格である。アドヴァイタ学派においては伝統的に、属性を持つブラフマンである主宰神 (īśvara) の夢眠状態の姿であるとされる⁽¹⁴⁾。マドゥスーダナの学説においては、ヒラニヤガルバは全ての次元の世界を創造する主宰神ではなく、超越的な個我 (jīva)⁽¹⁵⁾であるが、目に見える粗大な世界の創造者であり、その意味で創造神ブラフマーと呼ばれる⁽¹⁶⁾。ここではヒラニヤガルバはブラフマー神という属性を持つブラフマンとして言及されており、また ChāndUp や BṛhadUp におけるブラフマン (ブラフマー神) の世界がここではヒラニヤガルバの世界と述べられていると考えられる。

神道に行った者達でも、象徴を念想し、稲妻の世界にまで⁽¹⁷⁾行った者達はその世界から戻って来る。更に、ヒラニヤガルバの世界に導かれた者であっても、五火の明知等を念想するだけで、ヒラニヤガルバ等への念想をしない者達は、そのヒラニヤガルバの世界における享受が終わる時に、その世界から戻って来るというのである。このことは、ChāndUp や BṛhadUp で「五火の教えを知る者はブラフマンの世界に到達する」と説かれていることを受容しつつも、マドゥスーダナは解脱と解していないことを意味している⁽¹⁸⁾。シャンカラも、象徴を念想する者やブラフマンを望まない者、即ちブラフマンを念想の対象としない者にブラフマンへの到達はないことを述べている⁽¹⁹⁾。Passage 1 においてヒラニヤガル

バは属性を持つブラフマンのことを指していると考えられるため、マドゥスーダナはこのシャンカラ説を継承していると考えられる。しかし、恐らくシャンカラは聖典の記述に基づいて五火の明知への念想だけで漸進解脱が可能であると考えていたのに対して、マドゥスーダナは属性を持つブラフマンであるヒラニヤガルバ等への念想をせずに五火の明知等を念想するだけでは漸進解脱は不可能と考えており、この点に違いが見られる²⁰⁾。

一方、小さな虚空等を念想する者達は、ヒラニヤガルバに達し、その世界の享受が終わる時に次第に解脱する、と小さな虚空等を念想する者達には漸進解脱があると述べている。文脈上、小さな虚空等を念想するという事は属性を持つブラフマンを念想することであると考えられるが、この点を以下に確認したい。

マドゥスーダナは、BhG 8.5において「臨終の時に、私のみを想起しつつ肉体を脱して逝く者は、私の状態に至る」²¹⁾と述べられていることに対して、以下のような註を付している。

Passage 2 BhGGAD 381,30-382,23 (on BhG 8.5): **mām eva bhagavantam vāsudevam adhiyajñam saṅgam nirguṇam vā paramam akṣaram brahma na tv adhyātmādikam smaran sadā cintayams tatsaṃskārapāṭavāt samastakaraṇāgrāma-vaiyagryavaty antakāle ’pi smaran kalevaram muktvā śarīre ’hammābhīmānam tyaktvā prānaviyogakāle yaḥ prayāti saṅgadhyanapakṣe “agnijyotirahaḥ śuklah”²²⁾ ityādivakṣyamāṇena devayānamārgena pitṛyānamārgāt prakarṣeṇa yāti sa upāsako madbhāvam madrūpatām nirguṇabrahmabhāvam hiranyagarbhalokabhogānte yāti prāpnoti.**

私のみを、即ち主ヴァースデーヴァであり、最高の祭式であり、属性を持つ、或いは属性を持たない最高者であり、不壊者であるブラフマンであり、しかし内我等ではないものを想起しつつ、即ち常に思念しつつ、その潜勢力が鋭利になるので、全ての器官の集まりが接収される臨終の時にも「私のみを」想起しつつ肉体を脱して、即ち生氣が離れる時に、身体に対する「私である」、「私のもの」という思いなしを捨てて逝く或る者、即ち属性を持つ「ブラフマンを」

瞑想するという立場において、「火、光明、昼、白[月]」等と述べられている、祖霊に通じる道より勝れた、神に通じる道によって行く者、その念想者は、私の状態、即ち私のあり方、属性を持たないブラフマンの状態に、ヒラニヤガルバの世界の享受の終わる時に至る、即ち達する。

ここでは、臨終の時に属性を持つブラフマンを瞑想する者は、神道によって属性を持たないブラフマンの状態に達する、と述べられている。しかし、属性を持たないブラフマンの状態に達するのはヒラニヤガルバの世界の享受の終わる時とされているので、先ず属性を持つブラフマンを瞑想する者は、神道を通してヒラニヤガルバの世界に達し、最終的に、その世界の享受が終わる時に属性を持たないブラフマンの状態に達する、というのである。

この Passage 2 は神道を進んで行く者の議論であり、Passage 1 と同じく神道を通じての漸進解脱を説いたものと考えられる²³⁾。そのため、Passage 1 の「小さな虚空等への念想」とは、属性を持つブラフマン²⁴⁾に対する念想に該当すると言えよう。また、属性を持たないブラフマンに達する、ということから、漸進解脱の解脱とは、究極的な解脱であることが理解出来る。

以上の検討によると、BhGGADに見られるマドゥスーダナの漸進解脱説は以下のようなものである。属性を持つブラフマンを念想する者は、神道を通してヒラニヤガルバの世界に到達する。そしてそのヒラニヤガルバの世界の享受が終わる時に、属性を持たないブラフマンに到達し、究極の解脱を達成するのである。このマドゥスーダナの漸進解脱説は、神道を通じてヒラニヤガルバ、すなわちブラフマン（ブラフマー神）の世界に至り、その世界の終わりに解脱に至る、という点はシャンカラの漸進解脱説を踏まえたものである。しかしマドゥスーダナが、属性を持つブラフマンへの念想ではない五火の明知への念想だけではヒラニヤガルバの世界の享受はあるが、属性を持たないブラフマンには到達できず解脱できない、と考えている点はシャンカラ説と異なっている²⁵⁾。

3. Siddhāntabindu における漸進解脱説

ところでマドゥスーダナは、属性を持つブラフマ

ンに対する念想を具体的にはどのようなものと考えていたのであろうか。管見に依ると BhGGAD には具体的な「小さな虚空等への念想」の方法に関する記述は見られない。この点に関して、マドゥスーダナの別の著作 *Siddhāntabindu* (SB) に聖音オームへの念想による漸進解脱が説かれている。属性を持つブラフマンに対する念想の具体的な一例を見るため、以下ではその箇所を検討したい。

Passage 3 SB 439,2-441,2: *evam adhyātmaṃ viśvaḥ, adhibhūtaṃ virāt, adhidaivaṃ viṣṇuḥ. adhyātmaṃ jāgrat, adhidaivaṃ pālanam, adhibhūtaṃ sattvaguṇaḥ. evam adhyātmaṃ taijasaḥ, adhibhūtaṃ hiraṇyagarbhaḥ, adhidaivaṃ brahmā, adhyātmaṃ svapnaḥ, adhidaivaṃ sṛṣṭiḥ, adhibhūtaṃ rajoguṇaḥ. evam adhyātmaṃ prājñaḥ, adhibhūtaṃ avyākṛtam, adhidaivaṃ rudraḥ, adhyātmaṃ susuptiḥ, adhidaivaṃ pralayaḥ, adhibhūtaṃ tamoguṇaḥ. evam adhyātmādhībhūtādhidaivānām ekatvāt praṇavāvayavatrayasahitānām upahitānām aikyopāsanaḥ hiraṇyagarbhalokaprāptiḥ, antaḥkaraṇasuddhidvārā kramamuktis ca.*

以上のように、[アートマンは] 個我に関しては (adhyātma) ヴィシュヴァ (viśva) であり、元素に関しては (adhibhūta) ヴィラージュ (Virāj) であり、神格に関しては (adhidaiva) ヴィシュヌ [神] (Viṣṇu) である。個我に関しては覚醒 [状態] (jāgrat) であり、神格に関しては存続 (pālanam) であり、元素に関しては純質性 (sattvaguṇa) である。同様に、[アートマンは] 個我に関してはタイジャサ (taijasa) であり、元素に関してはヒラニヤガルバ (Hiraṇyagarbha) であり、神格に関してはブラフマー [神] (Brahmā) である。個我に関しては夢眠 [状態] (svapna) であり、神格に関し

ては創出 (sṛṣṭi) であり、元素に関しては激質性 (rajoguṇa) である。同様に、[アートマンは] 個我に関してはプラージュニヤ (prājña) であり、元素に関しては未顕現者 (avyākṛta) であり、神格に関してはルドラ [神] (Rudra) である。個我に関しては熟睡 [状態] (susupti) であり、神格に関しては還滅 (pralaya) であり、元素に関しては暗質性 (tamoguṇa) である。以上のように、個我に関することと元素に関することと神格に関することは同一のものであるので、聖音 (praṇava, om) の三つの部分 (a, u, m) と結びついた諸の制約されたものが同一のものであることを念想することによって、ヒラニヤガルバの世界への到達があり、そして内官が清浄となることによって漸進解脱がある²⁶⁾。

この Passage 3 の内容²⁷⁾を、SB に対するナーラーヤナ・ティールタ (Nārāyaṇa Tīrtha, ca. 18th) の註釈 *Nārāyaṇī* (Nā, or *Laghuvyākhyā*) を参考にして²⁸⁾整理すると、表 1 のようになる²⁹⁾。

表 1 の第一、第二、第三の集合は、個我に関して、元素に関して、神格に関して制約されたアートマン (属性を持ったブラフマン) を指しており、それがそれぞれ聖音オームの a 字, u 字, m 字と結びついている。そしてそれら全てが同一のものであることを念想することによって、ヒラニヤガルバの世界への到達がある、というのである³⁰⁾。従って、ここでの属性を持つブラフマンに対する念想とは、「聖音オームと結びついた諸の制約されたものが同一であることを念想すること」であることが理解出来る。この Passage 3 に見られる聖音オームによる念想は *Māṇḍūkyaopaniṣad* (MāṇḍUp) とそれに対するシャンカラの *Māṇḍūkyaopaniṣadbhāṣya* (MāṇḍUpBh) 等に基づくものであり³¹⁾、更にこの念想によって漸進解脱が出来るという考え方は PrUp に対するシャン

表 1 SB に見られる念想の要素一覧

	個我に関して (adhyātma)	元素に関して (adhibhūta)	神格に関して (adhidaiva)	結びつく 聖音の音
第一の集合 (prathamasaṃhāra)	ヴィシュヴァ 覚醒状態	ヴィラージュ 純質性	ヴィシュヌ 存続	a 字
第二の集合 (dvitīyasaṃhāra)	タイジャサ 夢眠状態	ヒラニヤガルバ 激質性	ブラフマー 創出	u 字
第三の集合 (tritīyasaṃhāra)	プラージュニヤ 熟睡状態	未顕現者 暗質性	ルドラ 還滅	m 字

カラの解釈に見られる³²⁾。従ってここでのマドゥスーダナの漸進解脱説は、聖音オームに対する念想によってヒラニヤガルバの世界に至るという点は PrUp とそのシャンカラの解釈によりつつ、具体的な念想の方法は MaṇḍUp 等に基づくというように、複数のウパニシャッド解釈を総合して形成されたものと言える。また、ここでは聖音オームの念想者が神道を通して行くのかどうかの記述はないが、神道を通してヒラニヤガルバの世界に到達すると考えても矛盾はないので、神道を通して行くと考えていいであろう。

4. ヒラニヤガルバの世界

ところで SB では、以上の様な念想によってヒラニヤガルバの世界への到達があると述べており、一方漸進解脱は内官が清浄になることによる、と述べている。また、先に検討してきた BhGGAD においても、ヒラニヤガルバの世界に至った者達は、その享受の終わる時に次第に解脱する、と述べられていた。ではマドゥスーダナは、ヒラニヤガルバの世界に到達した者達は、具体的にどのように解脱すると考えていたのであろうか。マドゥスーダナ以前のアドヴァイタ学派の学匠の著作には、ブラフマン（ヒラニヤガルバ）の世界での記述は見られないが、マドゥスーダナの BhGGAD ではそれに対する言及がなされている。以下ではその点を確認したい。

以下に見る Passage 4 は、労苦の多少に応じてその結果にも優劣がある、という対論者の主張に対する反論となっている。これ以前の BhG 12.5³³⁾に依れば、労苦が多いとされるのが属性を持たないブラフマンに対する念想である。それに対して労苦が少ないのが属性を持つブラフマンに対する念想であるが、いずれも最終的には最高のアートマンの直証という一つの最高の解脱に到達することが述べられる。

Passage 4 BhGGAD 507,18-23 (on BhG 12.6-7):
na, saṅuṇopāsanaḥ nirastasarvapatibandhānam
vinā gurūpadeśam vinā ca śravaṇamanānānīdī-
dhyāsanādyaḥsvāntīkleśam svayam avirbhūtena
vedāntavākyeṇśvaraprasādasahakṛtena tattvajñā-
nodayād avidyātkāryānivr̥tīyā brahmaloka
evaiśvaryaḥbhogānte nirguṇabrahmavidyāphalapa-
ramakaivalyopapatteḥ. “sa etasmāḥ jīvaghaṇāt
parāt paraṁ puriśayam puruṣam iḥṣate”³⁴⁾ iti śru-

teḥ. sa prāptahiraṇyagarbhaisvārya bhogānta etas-
māḥ jīvaghaṇāt sarvajīvasamaśtīrūpāt parāc-
chreṣṭhād dhiraṇyagarbhāt paraṁ vilakṣaṇam
śreṣṭham ca puriśayam svahr̥dayaguhāniviṣṭam
puruṣam pūrṇam pratyagabhinnam advitīyam
paramātmānam iḥṣate svayam avirbhūtena
vedāntapramāṇena sākṣātkaroti, tāvatā ca mukto
bhavaty arthaḥ.

[労苦の多い少ないによって、その結果にも優れたものと劣ったものがある、と対論者が言うとする] そうではない。属性を持つ [ブラフマン] への念想によって一切の障害を取り除いた者達にとって、師の教示がなくとも、また聴聞と思惟と瞑想等の反復という労苦がなくとも、主宰神の恩寵に補助されて自然と出現したヴェーダーンタの文章によって、真実に対する知が生起するので、無明とその結果が消失することによって、他ならぬブラフマンの世界において主宰性 (aiśvarya)³⁵⁾の享受が終わる時、属性を持たないブラフマンに対する明知という結果である最高の独存状態が生じるから。「彼は、この個我の集りたる最高者よりも最高の都城にいるプルシャを見る」という天啓聖典があるから。彼、即ちヒラニヤガルバの主宰性を獲得した者は、享受の終りに、この個我の集り、即ち一切の個我の総体をあり方とする最高者、即ち最も勝れたヒラニヤガルバ³⁶⁾よりも最高の、即ち特徴を欠いた、また最も勝れた都城にいる、即ち自身の心臓の穴にいるプルシャ、即ち充滿し、個 [我] と区別されない、第二のものを持たない、最高のアートマンを見る、即ち自然と出現したヴェーダーンタという認識手段によって直証する。そして、その限りによって解脱した者 (mukta) となる、という意味である。

この Passage 4 では、属性を持つブラフマンの念想によってヒラニヤガルバの世界に到達した者が、ヒラニヤガルバの世界でどのように解脱に至るかが説かれている。それは以下のものである。即ち、ヒラニヤガルバの世界では、アドヴァイタ教学の修行論において重要とされる師の教示や聴聞、思惟、瞑想の反復という労苦なしに、主宰神の恩寵に補助されてヴェーダーンタの文章が自然と出現する。そしてそのヴェーダーンタの文章を認識手段として、ヒラ

ニヤガルバの世界におけるその主宰性という享受が終わる時、最高のアートマン、即ち属性を持たないブラフマンを直証し、その限りにおいて解脱する、というのである。

Passage 3 では、「内官が清浄になることによって漸進解脱がある」と述べられていた。その「内官が清浄になること」とは、ヴェーダーンタの文章によって真実の知が生起することで、無明とその結果が消失することを指していると考えられる。また、「漸進」や Passage 1 における「次第に」解脱するということは、無明とその結果が、真実の知の生起によって次第に消失する、ということであると考えられる。

5. 結論

以上、マドゥスーダナの著作に見られる漸進解脱説を検討してきた。マドゥスーダナの漸進解脱説は、基本的にはシャンカラの漸進解脱説を踏襲したのになっている。それは、五火二道説の神道を通してブラフマン、すなわちヒラニヤガルバの世界に至り、その後解脱を達成するという点、そのために属性を持つブラフマンへの念想が必要であるという点、そしてその念想の一つとして聖音オームに対する念想が説かれている点である。しかし、聖典の記述に基づき、五火の明知への念想によって漸進解脱できるとするシャンカラに対して、マドゥスーダナは漸進解脱の方法を、より厳格に属性を持つブラフマンに対する念想のみに限定していたり、またヒラニヤガルバの世界での解脱のあり方に関する記述が見られたりと、両者の漸進解脱説には異なる点があることが明らかとなった。特に漸進解脱の方法に関する違いに関しては、属性を持つブラフマンに対する念想とマドゥスーダナの教説における属性を持つブラフマンたる主宰神やその主宰神に対するバクティ（信愛, bhakti）の重視という点との関わりが想定される。現在はまだこの想定を裏付ける明確な根拠を見つけられていないが、今後マドゥスーダナの主宰神論やバクティ論の解明と並行しつつ研究を進めていきたい。

（早稲田大学非常勤講師，
日本学術振興会特別研究員（PD））

注

- (1) 中村（1989）pp. 792-804 参照。
- (2) 初期アドヴァイタ学派においては、パドマパーダ（Padmapāda, ca. 8-9th）の *Pañcapādikā* (PPā), サルヴァジュニヤートマン（Sarvajñātman, ca. 9-10th）の *Samkṣepaśārīraka* (SŚ) に漸進解脱への言及が見られる。「[[反論] 諸のヴェーダーンタにおいて、生氣等を対境とする、ブラフマンでないものに対する諸念想が見られる。[答え] その通りである。それらも、結果であるブラフマンに至る次第によって、必ず解脱を果報として持つ」(PPā 176,1-3)。サルヴァジュニヤートマンに関しては Bhattacharyya (2000) pp. 208-210 参照。マドゥスーダナ以降では、ダルマラージャ・アドゥヴァリーンドラ（Dharmarāja Adhvarīndra, ca. 17th）の *Vedāntaparibhāṣā* (VP) に見られる。「そして、炎等の道を通じてブラフマンの世界に至り、他ならぬそこ（ブラフマンの世界）において聴聞によって真実の直証を得た、属性を持つ [ブラフマン] の念想者達は、ブラフマー [神] と共に解脱する」(VP 168,3f)。しかし、中期アドヴァイタ学派の文献において漸進解脱説に言及しているものは、BSBh 等に対する註釈書以外の独立した著作の中には筆者はいまだ見出していない。もちろん、このことは全く中期アドヴァイタ学派において漸進解脱説が顧みられなかったということは意味していない。
- (3) 本稿では、シャンカラ以後、アドヴァイタ学派内の二大学派であるパーマティー学派とヴィヴェラナ学派の軸となる、ヴァーチャスパティ・ミシュラ（Vācaspatimīśra, ca. 9-10th）の *Bhāmāṭī* やプラカシャートマン（Prakāśātman, ca. 10th）の *Pañcapādikāvivarāṇa* が出揃うアドヴァイタ学派の学説確立期である 8-10 世紀をアドヴァイタ学派の初期と考える。そして、11 世紀から 13 世紀頃のアドヴァイタ教学の論理的醸成期をアドヴァイタ学派の中期と考え、14 世紀から 17 世紀頃までの、学説綱要書製作期や顕著に有神論化の起こった時代をアドヴァイタ学派の後期と考える。この分類は、島（2012）p. 13f. によるアドヴァイタ学派の三分類の時期と一致するが、その時代の特徴という点では少し異なる。
- (4) 本稿は、2015 年 9 月に高野山大学で行われた日本印度学仏教学会第 66 回学術大会での発表「マドゥスーダナ・サラスヴァティーの文献に見られるブラフマンとヒラニヤガルバの関係」に基づいている。この発表で論じたマドゥスーダナのヒラニヤガルバ派（Hairaṇyagarbha）に対する批判に関しては Manabe (2016) として学会誌上に発表した。同時に論じたマドゥスーダナの漸進解脱の箇所に関しては誌上で発表をしていなかった。本稿は漸進解脱のみに焦点を当てて改めて論じ直したものである。
- (5) 五火二道説に関しては ChāndUp 5.4.1-5.10.2, BṛhadUp 6.2.9-6.2.15, 服部（1979）pp. 168-173 参照。特に五火の明知によって神道を通してブラフマンの世界に達することは、ChāndUp 5.10.1-5.10.2, BṛhadUp 6.2.15 に説かれている。
- (6) 念想（upāsana）とは「A は B である」と同置する心的過程のことである。服部（1979）p. 44 参照。
- (7) Patki (1996) pp. 25f. 参照。
- (8) 「結果であるブラフマンの世界の帰滅が差し迫っている時、当にそこで正しい見解が生じている者達は、彼等を見ているヒラニヤガルバと共に、それ（ヒラニヤガルバ）

- より高次の、完全に正常なヴィシュヌの最高の境地に到達する、と。このように、漸進解脱は、『戻って来ない』等という天啓聖典の諸表述によって承認されるべきである」(BSBh 496,5-7 (on BS 4.3.10)).
- (9) シャンカラはBSBhにおいて「更に、この三つの音量によるオームというこの音のみによって最高のプルシャを瞑想する者」(PrUp 5.5: *yaḥ punar etaṃ trimātreṇom ity etenaivakṣareṇa paraṃ puruṣaṃ abhidhyāyīta*) の解釈を示す際に、聖音オームによって最高のアートマン、即ちブラフマンを念想することで漸進解脱に至ることを説いている。「三つの音量 (trimātra) [から成る] オーム字という拠所によって最高のアートマンを瞑想する者にとって、ブラフマンの世界への到達が [瞑想の] 結果である。そして、次第に正しい見解の生起がある、と漸進解脱が意図されている」(BSBh105,23f. (on BS 1.3.13)). 中村 (1989) p. 799, また吉水 (2010) pp. (35)-(36) 参照。
- (10) 中村 (1989) pp. 792f. 参照。
- (11) この直前には、死んで二道のもう片方である祖道 (pitṛyāna) へ去った者は、必ず現世に戻って来ることが述べられている。BhGGAD 403,23-26 参照。
- (12) 「そして、その人でないプルシャが、彼らをブラフマンに導く」(ChāndUp 4.15.5) : 「それ、即ちそこにいる彼らを、プルシャ、即ちブラフマンの世界からやって来た、或る人でない者、即ちマヌの子孫という創造物に生まれた者が人であり、人ではないのが人でない者であり、そのプルシャが、彼らをブラフマン、即ちサティヤ世界にいる者に導く」(ChāndUpBh 462,12-14 (on ChāndUp 4.15.5)).
- (13) 「このブラフマンの都城において、或る小さな蓮華 [のような] 住居があり、その内部に [より] 小さな虚空がある。その [虚空の] 内部のものは探求されるべきであり、それは実に知ろうと望まれるべきである」(ChāndUp 8.1.1). 「小さな虚空」(*daharākāśa) に関する議論がBSBh on BS 1.3.14-21 に見られる。
- (14) 眞鍋 (2017) 参照。
- (15) 夢眠状態における個我はタイジャサ (taijasa) と呼ばれ、個別体 (vyaṣṭi) と言われるのに対して、ヒラニヤガルバは諸タイジャサの総体 (samaṣṭi) であると言われる。fn. 36 また眞鍋 (2017) 参照。
- (16) マドゥスーダナの著作 *Siddhāntabindu* (SB) に以下のような記述がある。「原因となるもの (無明) の激質によって制約された者がブラフマー [神] であり、創出者である。しかし、ヒラニヤガルバは、[微細な] 大元素の原因ではないので、ブラフマー [神] ではない。そのようであっても、粗大な元素の創出者であるので、或る時にブラフマー [神] と比喩的に言われる」(SB 350,5-351,2)。
- (17) 中村 (1989) によれば、シャンカラは神道を (1) 火葬の炎、(2) 日、(3) 月の満ちつつある半箇月、(4) 昼の長くなる半月、(5) 歳、(6) 神々の世界、(7) 風神の世界、(8) 太陽、(9) 月、(10) 電光 (稲妻)、(11) ヴェルナ神の世界、(12) インドラ神の世界、(13) プラジャーパティ神の世界、(14) ブラフマンという階梯に整理しているという。中村 (1989) pp. 793f. 参照。
- (18) 筆者は Manabe (2016) において、ヒラニヤガルバを念想しないで五火の明知等を念想する者達はヒラニヤガルバ派のことであり、この Passage 1 においてマドゥスーダナはヒラニヤガルバ派の解脱観と解脱手段とを否定して
- いることを指摘した。
- (19) 「象徴を拠所とする者達を除いて、[ブラフマンの] 変容を拠所とする全ての他の者達を [人でないプルシャは] ブラフマンの世界に導く、と軌範師 (ācārya) パーダラーヤナは考える。というのは、以上のように双方の関係が容認される場合、如何なる過失もないから。象徴と異なったものに対する念想においても、[神道に至ることに] 制約がないという規則はあり得るから。そして、『それを望む者は』というこのことは、双方の関係に相応しい根拠であると見られるべきである。というのは、ブラフマンを望む者は、ブラフマンの主宰性を獲得するだろう、ということが結果として起こるから。『それを念想する通りに、[彼は] そのようにのみなる』という天啓聖典があるから。しかし象徴に対しては、ブラフマンを望むことはない。[象徴に対する] 念想は象徴が主要なものであるから」(BSBh 502,22-503,2 (on BS 4.3.15)). また、「[反論] ブラフマンを望まない者もブラフマンに達する、と伝承されている。例えば、五火の明知 [を説く聖典] において、『彼は彼らをブラフマンに導く』ということが明白である (bhavatu)。[答え] そのように明白な言明がある場合には [ブラフマンは] 得られるが、それ (明白な言明) が存在しない場合には、一般規則的な『それを望む者』(tatkratu) という規則によって、ブラフマンを望む者のみにそれ (ブラフマン) への到達があり、そうでない者達には [ブラフマンへの到達は存在し] ない、と理解される」(BSBh 503,2-4 (on BSBh 4.3.15)).
- (20) fn. 19 に挙げた BSBh on BS 4.3.15 では、天啓聖典に説かれているために五火の明知に対する念想のみによって低次のブラフマン、即ちヒラニヤガルバへ到達することが出来ることが説かれている。けれどもこの箇所からでは、ヒラニヤガルバへ到達した後、漸進解脱に至るかどうかははっきりしない。しかし、BS on BSBh 4.3.7-14 kārṇyādīkaraṇa では、低次のブラフマンへ至った者は漸進解脱すると説かれているので、シャンカラは五火の明知に対する念想による漸進解脱を認めていたと考えられる。マドゥスーダナも、恐らくは天啓聖典に説かれているため、Passage 1 に見られるように五火の明知の念想によってヒラニヤガルバの世界に到達することは認めているのだと考えられる。しかし彼はその一方で、五火の明知に対する念想はブラフマンを念想の対象としていないため、高次のブラフマンへ至ること、即ち解脱することは出来ずに回帰すると考えていたのである。そのためマドゥスーダナはシャンカラとは意見が異なっていると考えられる。
- (21) 「そして臨終の時に、私のみを想起しつつ肉体を脱して逝く者は、私の状態に至る。この点に関して疑惑はない」(BhG 8.5).
- (22) BhG 8.24a.
- (23) この Passage 2 の後では「属性を持たないブラフマンを想起する立場」が説かれるが、その立場では即時解脱が説かれている。「一方、属性を持たないブラフマンを想起する立場において、肉体を捨てて逝く、とは、世間の見解を意図してである。『彼の諸生氣は去らない』(BrhadUp 4.4.6) 『その [身体] に [それら生氣は] 集められる』(BrhadUp 3.2.11) という天啓聖典の故に、彼には生氣が去ることがないので、行くことはないから。彼は私の状態に、即時にのみ至る。『ブラフマンそのものでありつつ、ブラフマンにも達する』(BrhadUp 4.4.6) という天啓聖典

の故に」(BhGGAD 382,23-25)。このことから Passage 2 が漸進解脱を説いたものであることが分かる。

(24) シャンカラは、BSBh on BS 1.3.14-21 (daharādhikarāṇa) において「小さな虚空」(*daharākāśa) は最高のアートマンであると述べている。しかし、BSBh on BS 1.3.20 では、小さな虚空を最高のアートマンと考えている者も、小さな虚空を個我として言及出来るとも述べる。この個我の意味で言及される小さな虚空は属性を持つブラフマンに相当すると言えよう。BSBh 115,23-116,10 (on BS 1.3.20) 参照。

(25) 以上の Passage 1, Passage 2 に関しては Manabe (2016) も参照。

(26) この直後では、属性を持たないブラフマンを知ることによって即時解脱があることが説かれている。「しかし、この一切の限定条件を否定する、目撃者たる精神性(属性を持たないブラフマン)のみを知ることによって、即時にのみ解脱がある」(SB 441,2f)。

(27) Passage 3 が説かれる背景に関しては、眞鍋 (2017) を参照。

(28) 「最上の統御者であるパラマハンサ [遊行者] 達にとつて、聴聞等によるアートマンの知が解脱の手段である」と述べてから、遅鈍な統御者である、知を有さない遊行者達にとっての、知の達成手段を述べる。以上のように、と。以上のように、これら諸の制約されたものが同一なものであることを念想することによって、ヒラニヤガルバの世界への到達があり、内官を清浄にすることによって漸進解脱がある、と結びつく。個我に関しては、身体に関して存立していることである。元素に関しては、粗大元素の総体(ヴィラーージュ)に関して存立していることである。ブラフマー [神] は激発を限定条件としている。覚醒、とは、個我に関するヴィシュヴァによって直接的に経験される覚醒状態である、という意味である。神格に関しては、ブラフマー [神] という結果である。元素に関しては、一切の元素に関して存立していることである。これが第一の集合である。同様に、個我に関しては、とは微細身に関して存立していることである、という意味である。元素に関しては、微細元素の総体(ヒラニヤガルバ)に関して存立していることである。神格に関しては、その両者と異なる、純質性を限定条件とすることである。個我に関しては、タイジャサによって直接的に経験される夢眠状態である。神格に関しては、ヴィシュヌ [神] という結果である。元素に関しては、一切の元素に関して存立していることである。これが第二の集合である。個我に関しては、無知に関して存立していることである。元素に関しては、未顕現者という、心の顕現等と結合した無知に関して存立していることである。未顕現者とは主宰神である。神格に関しては、その両者と異なる、暗質性を限定条件とすることである。個我に関しては、ブラージュニャによって直接的に経験される熟睡状態である。元素に関しては、元素に関して存立していることである。神格に関しては、ルドラ [神] という結果である」(Nā 438,26-440,24)。Nā の記述は、SB の記述と正確には対応していない。そのため、表 1 は Nā を参考に SB の記述を整理したものである。

(29) 眞鍋 (2017) では、Passage 3 を個我と主宰神との違いという観点から整理したため、表 1 とは異なった整理の仕方をしていいる。眞鍋 (2017) 表 4 参照。

(30) この念想の詳細に関しては、以下の Nā を参照。「同様に [以下を註釈する]。聖音(オーム)の三つの部分と結びついた、即ち聖音の部分とあり方とする a 字, u 字, m 字とあり方とする表述者と結びついた上述の集合は同一のものであるから、即ち遍充されるものと遍充するものの [関係] 様態という境界によって区別されないから、制約された、[以下を註釈する]。制約されることを本質とする上述の諸集合が同一のものであることを念想することによって、[ということである]。ヒラニヤガルバの世界とは、サティヤ世界である。直後に身体を欠いた依存状態がある、という意味である。第一の部分である a 字が表述者である。第一の集合が被表述者である。それら [両者] が同一のものであることが熟慮されるべきである。同様に、第二の部分と第二の集合が、第三の部分と第三の集合が同一のものであることを熟慮して、それから第一の集合が原因である第二の [集合] と、第二の [集合] が第三の集合と同一のものであると熟慮すべきである。その熟慮によって、サティヤ世界への到達が生じる。直後に、彼(ヒラニヤガルバ)と共に解脱する。『[世界の]再吸収 (pratisamcara) が起こり、最高者 [の支配] が終わる時、ブラフマン(ヒラニヤガルバ)と共に、自己を統御したそれら一切の者は、最高の境地へと入る』(Kārma Prāna 1.11.284) 等の天啓聖典があるから、とまとめられる」(Nā 440,24-441,22)。

(31) ブラフマーナダ・サラスヴァティー (Brahmānanda Sarasvatī, ca. 18-19th) による SB 註 *Nyāyaratnāvalī* (NR) に以下の記述がある。「従って、第一の集合が、原因である第二の [集合] と同一であること、第二の [集合] も原因である第三の [集合] と同一であることを熟慮して、サティヤ世界に到達して、そこにおいて存在しているヒラニヤガルバと共に解脱する。『ヌリシンハ・ターパニーヤ (・ウパニシャッド)』、『アタルヴァ・シカー (・ウパニシャッド)』、『マードウキヤ (・ウパニシャッド)』等という天啓聖典と、それらの註釈が認識手段であると知られるべきである」(NR 440,16-441,7)。特に MāṇḍUpBh on MāṇḍUp 3 と シャンカラ の *Gauḍapādīyākārikābhāṣya* on *Gauḍapādīyākārikā* 1.2 に関連する議論が見られる。この点に関しては別の機会に論じたい。

(32) fn. 9 参照。

(33) 「非顕現なものに心が向かった彼等の労苦はより多い。身体を持つ人々にとって、非顕現な帰結は苦勞して (duḥkham) 到達されるから」(BhG 12.5)。

(34) PrUp 5.5.

(35) シャンカラによると、この主宰性 (aiśvarya) とは、他の手段あるいは努力を必要としないこと、他の支配者を必要としないことであるという。中村 (1989) pp. 796f. 参照。恐らくマドゥスーダナも同様のことを考えていたと思われる。

(36) ヒラニヤガルバが個我の総体であることが BSBh on BS 1.3.13 において説かれている。BSBh 105,10-14 参照。

参考文献

一次文献

BṛhadUp *Bṛhadāraṇyakopaniṣad*: See ChāndUpBh.

BS *Brahmasūtra*: See BSBh.

BSBh *Brahmasūtrabhāṣya* (Śāṅkara): *Brahmasūtra with Śāṅkarabhāṣya*. (Works of Śāṅkarācārya in Original San-

- skrit Vol. III) Dillī: Motilal Banarsidass 1985 (Repr.: 2007).
- BhG *Bhagavadgītā*: See BhGGAD.
- BhGGAD *Bhagavadgītāgūḍhārthadīpikā* (Madhusūdana Sarasvatī): *Srimadbhagavadgītā with the Commentaries Śrīmadśāṅkarabhāṣya with Ānandagiri, Nīlakaṅṭhī, Bhāṣyotkarśadīpikā of Dhanapati, Śrīdhartī, Gītārthasamgraha of Abhinavaguptācārya, and Gūḍhārthadīpikā of Madhusūdana with Gūḍhārthattavāloka of Śrīdharmadattaśarmā (Bhachchāśramā)*. Ed. Wāsudev Laxmaṇ Śāstrī Paṅśīkar. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press. 1936 (2nd Ed.).
- ChāndUp *Chāndogyopaniṣad*: See ChāndUpBh.
- ChāndUpBh *Chāndogyopaniṣadbhāṣya* (Śāṅkara): *Ten Principal Upaniṣads with Sankarabhāṣya*. (Works of Śāṅkarācārya in Original Sanskrit I) Delhi: Motilal Banarsidass 1964 (Repr.: 2007).
- MāṇḍUp *Māṇḍūkyopaniṣad*: See ChāndUpBh.
- MāṇḍUpBh *Māṇḍūkyopaniṣadbhāṣya* (Śāṅkara): See ChāndUpBh.
- Nā *Nārāyaṇī or Laghuvyākhyā* (Nārāyaṇa Tīrtha): See SB.
- NR *Nyāyaratnāvalī* (Brahmānanda Sarasvatī): See SB.
- PPā *Pañcapādīkā* (Padmapāda): *Pañcapādīkā of Śrī Padmapādācārya with the commentaries of Prabodhaparīśodhinī of Āmasvarūpa and Tāparyārthadyotinī of Vijñānātman and Pañcapādīkāvivaraṇam of Śrī Prakāśātman with Tāparyādīpikā of Citsukhācārya and Bhāvaprakāśikā of Nṛsimhāśramin Volume I (I & II Varṇakās)*. Ed. Dr. N. S. Ramanuja Tatacharya (Kendriya Sanskrit Vidyapeetha, Tirupati Series No. 5) Tirupati: Kendriya Sanskrit Vidyapeetha 1985 (1st Ed.: Madras: Oriental Manuscripts Library 1958).
- PrUp *Praśnopaniṣad*: See ChāndUpBh.
- SB *Siddhāntabindu* (Madhusūdana Sarasvatī): *Siddhāntabindu of Madhusūdana Sarasvatī: Being a Commentary on the Daśaśloka of Śāṅkarācārya With two Commentaries Nyāya Ratnāvalī of Gaudabrahmānanda and Laghuvyākhyā of Nārāyaṇa Tīrtha*. Ed. Tryambakram Śāstrī Vedāntācārya. (The Kashi Sanskrit Series 65) Varanasi: Chaukhambha Sanskrit Sansthan 2nd Ed. 1989.
- VP *Vedāntaparibhāṣā* (Dharmarāja Adhvarīndra): *Vedāntaparibhāṣā*. Ed. with Tr. S. S. Suryanarayana Sastri. (The Adyar Library Series Vol. 34) Chennai: 1942 (Repr.: 2003).
- Kanakura, Yensho 金倉圓照. 1980. 『シャンカラの哲学 上 ブラフマ・スートラ釈論の全訳』 春秋社.
- . 1984. 『シャンカラの哲学 下 ブラフマ・スートラ釈論の全訳』 春秋社.
- Manabe, Tomohiro 眞鍋智裕. 2016. “Madhusūdana Sarasvatī’s Criticism of the Hiranyagarbha School: On the Liberation Theory,” *Journal of Indian and Buddhist Studies (Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)* 64-3. Japanese Association of Indian and Buddhist Studies (Nihon-Indogaku-Bukkyōgaku-Kai).
- . 2017. 「マドゥスーダナ・サラスヴァティーによるアートマンの四状態説の構造—アドヴァイタ学派におけるイーシュヴァラ観の相違」『東洋の思想と宗教』第34号, 早稲田大学東洋哲学会.
- Nakamura, Hajime 中村元. 1989. 『シャンカラの思想 [インド哲学思想第五卷]』 岩波書店.
- Patki, Rajani S. 1996. *The Concept of Upāsana: Worship in Sanskrit Literature*. Delhi: Sri Satguru Publications.
- Shima, Iwao 島岩. 2012. 『『パーマティー』の文献学的研究』 高島淳・森雅秀編, アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京外国語大学.
- Thibaut, George, trans. 1904. *Vedānta-Sūtras with the Commentary by Śāṅkarācārya*, Part 1. (The Sacred Books of The East Vol. 34) Oxford: Oxford University Press (Repr.: Delhi: Motilal Banarsidass 2004).
- , trans. 1962. *Vedānta-Sūtras with the Commentary by Śāṅkarācārya*, Part 2. (The Sacred Books of The East Vol. 38) Delhi: Motilal Banarsidass (Repr.: 2000).
- Yoshimizu, Kiyotaka 吉水清孝. 2010. 「シャンカラにおける瞑想の客体としての最高我 (paramātman) について」『論集』37, 印度学宗教学会.
- Yuda, Yutaka 湯田豊. 2000. 『ウパニシャッド—翻訳および解説』 大東出版社.
- . 2006. 『ブラフマ・スートラーシャンカラの註釈 (上)』 大東出版社.
- . 2007. 『ブラフマ・スートラーシャンカラの註釈 (下)』 大東出版社.

二次文献

- Bhattacharyya, Sujata Purkayastha. 2000. *Sarvajñātmamuni’s Contribution to Advaita Vedānta*. Calcutta: Punthi Pustak.
- Gambhīrānanda, Swāmī, trans. 1983. *Chāndogya Upaniṣad With the Commentary of Śāṅkarācārya*. Kolkata. Advaita Ashrama (6th Impr.: 2009).
- , trans. 1998. *Bhagavad-Gītā with the annotation Gūḍhārtha-Dīpikā by Madhusūdana Sarasvatī*. Kolkata: Advaita Ashrama (2nd Impr.: 2007).
- Hattori, Masaaki 服部正明. 1979. 『古代インドの神秘思想：初期ウパニシャッドの世界』 講談社現代新書.
- Kamimura, Katsuhiko 上村勝彦. 1992. 『バガヴァッド・ギーター』 岩波文庫.